

聖霊が降臨した時、「自分の故郷の言葉が話されているのを聞いて、あっけにとられてしまった(使徒 2:6)」諸外国からの帰郷者(2:5)はむしろ少数で、多くの者は酔っ払いの戯言だと思っていた(2:13)。

その状況は、ペトロが「今は朝の9時だから、この人たちは、あなたがたが考えているように、酒に酔っているのではない(2:15)」と、声を張り上げて(2:14)群衆に弁明していることから想像できる。

酔っ払い野郎と嘲る者(2:13)、何じゃこりゃと訝しむ者、異常な事態にときめく野次馬。泥酔状態のような集団(2:4)を目の当りにしたら、皆さんはどう思うだろうか。傍から見たら聖霊かどうかは分らないし。ペトロは「酔っ払いじゃないんだ」と、何が起きているかヨエル書を通して語る(2:16)。

「その後、わたしはすべての人にわが霊を注ぐ。あなたたちの息子や娘は預言し、老人は夢を見、若者は幻を見る。その日、わたしは、奴隷となっている男女にもわが霊を注ぐ(ヨエル 3:1~2,使徒 2:17~18)」。

注目すべき事柄は、霊が注がれる者に性別や年齢、社会層の違いに何の段差もないこと。民族派にして長幼序にやかましく、父権的な紀元前5世紀のヘブライ社会にあって、なんという「枠なし」。

「老人は夢を見る」はずだが多くの老人は、体力や気力、記憶力も衰えた、と消極的になる。「若者は幻を見る」はずだが多くの若者は、未熟だから、責任は負いたくない、と腰が引ける。

力の衰えや未熟さ、そんなことは当たり前だ。だが注がれた霊による夢を、老人はそのままにしてはならぬ。霊による幻を、若者はしまい込んでならぬ。なぜならそれは、あなただけのものではないのだから。

霊(pneuma)は風(pneuma)。あなたを吹き抜けて、誰かに吹くはずの神の息(pneuma)を、力が衰えたからといって、未熟だからといって、あなたの内にとどめておいてはならぬ。

霊による夢を、霊による幻を、露わにしてほしい。教会は、霊による夢と幻が形にされるキリストの身体なのだから。

「その日、わたしは奴隷となっている男女にもわが霊を注ぐ(ヨエル 3:2,使徒 2:18)」。「すると、彼らは預言する(使徒 2:18)」。

預言者でもなく、罪の奴隷となっている私たちが、霊によって我が夢を語り、我が幻を語る。

「上では、天に不思議な業を、下では、地に徴を示そう(使徒 2:19,ヨエル 3:3)」。天に不思議な業とは、さしずめイエスがなされた奇跡だろう。地に徴とは、イエスの言葉やふるまいだろう。

地に建てられた十字架が、天からの奇跡として私たちの罪を赦し、浄め、命の霊を注いで下さる。だからこそ、十字架の「主の御名を呼ぶ者は皆、救われる(ヨエル 3:5,使徒 2:21)」のだ。

天のことも、地のことも、いずれもイエス・キリストによる救いの徴。

天と地にまたがるイエスの業、時と場を超えるその業は、この地において御自身が洗礼を受け、聖霊が注がれることで始まった(ルカ 3:21~22)。

私たちに注がれる霊は(ヨエル 3:1~2)、イエスに注がれた聖霊に他ならない。いったい私たちは、イエスから何を学ぶ(まねぶ)のか。

イエスが聖霊を受けた自らに忠実であったように、私たちもまた「自らの霊性」を誠実にまっとうしたい。皆が同一のことをするのではない。

一つの聖霊は、私たちに注がれた結果、十人十色として現れる(1コリント 12:7~11)。ゆえに教会が進む方向は不明、だが前進だ。



《おまけのひとこと》

一人ひとりに聖霊の舌(使徒 2:3) どのような舌かは人が生きる痕跡で分かる 舌々は焰で それぞれに違いはない 聖霊はその人をその人のように生かす 聖霊は人という多様な姿で現れる